



## 追悼

### 名誉会員 窪田暁子先生への追悼のことば

稲沢 公一（東洋大学教授）

窪田先生のご逝去に対し、心よりお悔やみ申し上げます。

私は、1994年から3年間、東洋大学大学院博士後期課程で先生のご指導を受けた門下生の一人です。修了後も、四谷のご自宅に何度もお邪魔し、毎回、一献傾けながら、近況や著作の構想などについてお話をうかがってきました。東洋大学ご在職中から、毎年欠かさず3月に門下生一同が集まって誕生日会を開催するのが常でしたが、そろそろ今年の企画を考えようとした矢先に入院され、先生を囲みたいというみんなの思いはかなえられないままとなってしまいました。

先生は、何よりもまず聡明な方でした。小学校に入ったかどうかの頃、「突然ゼロの概念を発見した」という逸話を聞いたことがあります。水戸高等女学校から、今でいう飛び級に当たる4年生で東京女子高等師範学校（現・お茶の水大学）に入学され、化学を専攻されました。しかし、世はまさに戦時下であり、希望通りの進路を歩むことは必ずしもかなわなかったようです。

20代の半ばには、YWCAの職員奨学金を得てアメリカに渡り、コノプカに師事してグループワークを深く学ばれました。帰国後は、YWCA学生部から横須賀基督教社会館を経て、神奈川県職員として精神科病院に勤められました。患者さんたちとの出会いについては、遺著となった『福祉援助の臨床』（誠信書房）の「寸景」に数多く収められています。先生が患者さんたちから、どれほど多くのことを学ばれたかがよくわかります。現場をとっても大切にされた方でした。

病院に勤め始めた頃のこととして、「さまざまな患者さん（薬物依存症者）を目の当たりにしていると、いろんな人がいて、何でもありなんだと心がすり減ってくるのが自分でもわかる。しかし、そんな人間にはなりたくない」とある精神科医に相談したことがある。すると、その医師は、『その苦しみを神は知っている。そして、神が知っていることをあなたは知っている。だから大丈夫だ』と言ってくれた。そのとき、私は、人が人を慰めるというのはこういうことなのだ実感した」とおっしゃっていたことがあります。

大学院のゼミは、まさにグループワークでした。出席者全員が発言し、しかも、報告者を力づけるような雰囲気がいっつも漂っていました。理屈ばかりこねる私に対して、閉口し

ながらも、「あんたみたいな人ばかりでは困るけど、ま、一人ぐらいなら、福祉業界にも居場所はあるでしょう」とおっしゃって下さったことが今も耳底に残っています。

先生のおかげで今があります。本当にありがとうございました。